H27.3.7

「余命３カ月」が、１年近くに

Dr. 和の町医者日記

「生と死」シリーズ⑩

末期がん隠し最期まで働いたHさん

少しずつ春が近づいてきました。そろそろ在宅患者さんを招いてのお花見大会の準備を始めています。この季節になると、どうしても、ある患者さんの姿が浮かんできます。

Hさんは、ある介護施設のベテラン職員でした。60歳の節目を前に、息苦しさを自覚し、病院に駆け込みました。検査の結果、かなり進行した肺がんが見つかりました。すでにあちこちに転移しているので、手術の適応はないと判断され、抗がん剤治療を受けることになりました。介護の仕事を続けながら、病院の外来抗がん剤治療を半年以上続けられました。

夏のある日、Hさんが倒れ込むようにして病院に入ってこられました。

調べると大量の胸水がたまり、片側の肺の容積はゼロでした。相当な痛みもありそうな状態でした。20年前の私なら、すぐに胸水を何リットルも抜いたでしょう。仕事も辞めさせたでしょう。

しかし、Hさんは勤労意欲が強く、「職場で死ねたら本望やわ」と言われたので、ご本人の意志に寄り添う医療を行うことにしました。

自らの意思で抗がん剤治療を中止され、利尿剤とステロイドとモルヒネによる緩和医療を開始しました。

すると、1週間後には呼吸困難は軽減し、見違えるように元気が戻りました。ですが、ご家族だけには、「余命は3カ月程度で、年は越せないでしょう」と説明しました。

その年の秋になってもHさんは相変わらず仕事を続けていました。自転車に乗り、駅の階段を息を切らしながら昇りました。肺の容積は3分の1しかないのに不思議なほどすごい体力です。あまりに元気なので、当院の忘年会にご招待しました。ステージに上がり、「まだ生きていまーす！」なんて、職員を笑わせてくれました。普段患者さんにはとても見せられない裸踊りも見せながら、盛り上げてくれました。

果たして年を越え、春になってもHさんはまだ働き続け、なんと当直の仕事までされていましたが、切りのいい年度末で退職。在宅医療に移行しました。

まだ少し歩けたので、当院主催の春のお花見大会に招待しました。Hさんは得意のフルート演奏を披露されましたが、深刻な病状を知っている私には、Hさんが楽器を吹けること自体が不思議でした。

介護施設の入所者や花見の招待客は、余命がそう長くはない高齢者や末期がんの人たちばかりです。その中でも、おそらくHさんが一番先に天国に行くはずの状態だったのです。しかしHさんは、自分の病気のことは周囲には内緒にして、要介護者を喜ばせることに徹しておられました。

5月末になってから徐々に衰弱して痛みが強くなったので、緩和医療を強化しました。死期が近いと感じたHさんは、葬式の準備だけでなく、お墓の代金や永代供養料まで払っていました。部屋の片隅には、お坊さんへのお礼だけでなく「長尾先生へ」と書かれたポチ袋まで置かれていました。私が見つけると「これは死んでからあげるの！」と笑っていました。

そのHさんは最初に見えてから1年近くになる6月初旬、家族や友人、そして訪問看護師さんが見守る中、自宅で穏やかに旅立たれました。Hさんは末期がんでも大量の胸水と共存しながら最期まで好きな仕事を続けました。そして、死後のプロデュースも完璧になさった。そのせいでしょうか、余命3カ月だったのが、1年近くのご縁になりました。まさに、素晴らしい生き方、逝き方を身をもって教えていただきました。

長尾和宏（ながお・かずひろ）
東京医大卒業後、大阪大第二内科入局。平成7年、尼崎市で「長尾クリニック」を開業。外来診療から在宅医療まで〝人を診る〟総合診療を目指す。医学博士。近著「平穏死・10の条件」「胃ろうという選択、しない選択」はいずれもベストセラー。関西国際大学、東京医科大学客員教授。56歳。

緩和医療 痛みには、身体的痛み、精神的痛み、社会的痛み、魂の痛みの4つの痛みがあるとされる。これらのトータルペインを薬剤のみならず、傾聴や代替医療などで緩和する医療を緩和医療という。最近はがん以外の疾病にも適用されつつある。

ひょうご